

詩神の死

私をうたわせるものは、ただ一つ
この、今は踏みにじられている詩神の死骸
私はそれを腕に抱き上げて歩き出す

ぺちやくちや囀る詩人たちの溢れる往来を
私は流れに逆らって、ぶつかりぶつかり
詩神を腕に歩いてゆく

抱き上げた亡骸の重さのため
私の歩みはのろく、しかし、しっかりと
大地を踏みしめて、己に歩みを^{しか}確と伝える

私は返しに行くのだ、この亡骸を
詩神の初めて下り立った荒涼とした地に
光が彼を連れ去ってゆくだろう、故郷へ

そして私は再び歩き出すのだ、往来へと
詩神の教えを血とし、肉となして
詩を書くために、己の血で書くために

(1982.4.25)